平成２８年度　徳島市まち・ひと・しごと創生推進協議会
会議録（要旨）

と　き　　平成２８年１０月１７日（月）　午前１０時３０分から午前１１時５０分まで
ところ　　徳島市役所８階　庁議室

１　委員長あいさつ

２　地方創生に係る取組の現状について

（事務局）
「資料２　地方創生に係る取組の現状」に基づき、説明。

※　質問及び意見なし。

３　アクションプランについて

（事務局）
「資料３　アクションプラン」に基づき、説明。

※　質問及び意見の要旨は次のとおり。

（委員）
中小企業振興基本条例啓発事業の目標値（企業体験ツアー参加・児童生徒数）が、年間１５人は少なすぎる。
児童生徒に、徳島市にどんな企業があるかを幅広く知ってもらうことは、市内で就職したいと思う良い動機付けとなるため、もっと参加者を増やす方向で検討してもいいのではないか。

（事務局）
この事業は、平成２７年４月に徳島市中小企業振興基本条例が施行されたことを受け、開始した事業である。
市のマイクロバスを利用して、市内中小企業３社を廻るツアーを夏休みに実施したところ、定員１５人に対して１４７人の応募があり、非常に好評であった。受け手の企業の都合もあるため、どこまで拡大することができるかは検討を要するが、とても評判のいい事業であるため、拡大に向けて検討していきたい。

（委員）
　中学校学習指導要領において「職場体験」について触れられており、市内の中学校でもおそらく行っているところがあると思われるため、それらと重複しないことが必要である。

（委員）
　チャレンジ２「子育てするなら３人以上」は、言葉としていかがなものかと感じる。意味が分かりにくく、一つの家庭で３人以上出生するという意味なのか、３人集めて子育てするという意味なのか。
　徳島市として、出生率を上げていこうとするならば、若者の婚姻率を上げていく視点が必要ではないか。

（事務局）
　昨年度の策定段階から、チャレンジ２の表現については議論になったところである。
　人口減少対策は、今までの常識をくつがえすものにチャレンジしていかなければ難しいものであると考え、その意気込みも含めタイトルを「未来チャレンジ総合戦略」とした。
　実際に子どもを持ちたいという方はとても多く、希望出生率は１．８１という数字が出ている。こうした中、人口減少に歯止めをかけるためには、２人以上の出生率が必要であり、徳島市で子育てする環境を整えることにより、これを実現するという思いもあり、このチャレンジを掲げた。
　また、徳島市では、第３子以降の保育料負担軽減などの施策もあり、３人以上の施策をできるだけ推進しようというものである。

（委員）
　今の若者には、出会いの場があまりないので、誰かがお膳立てしないと、結婚できない面もある。
　できれば、徳島市の施策の中に、若者の出会いの場を支援するような取組を入れていくなど、若者が出会いの場をできるだけ持ち、結婚に踏み切れる支援を行政に考えてもらえるといい。

（委員）
　徳島市は、毎週のように楽しいイベントがある。殊更、徳島市が若者を集めるために何か取り組まなくても、日常的に行われているイベントを活用し、市が若者に参加を呼びかける支援を積極的に行ってはどうか。
　例えば、ＬＥＤアートフェスティバル等のような市内で行われるイベントに男女が参画するような仕掛けを徳島市ができるといい。

（委員）
　若者が結婚に前向きになれない大きな要因は、親が夫婦のあり方を、きちんと子どもに見せられているかという問題がある。イベントに若者が行き、出会うことで、結婚に結び付くのは難しい状況にある。
　また、併せて、非正規の若者が増えて、経済的な裏付けがないと結婚できない問題もある。結婚の前段で、大きな壁がいくつかある。
　子育てに対しても、大きな不安を抱えている人は多い。男性も女性も子育てをしながら働ける徳島市にするということ、それを見える化していくこと、それらが結婚や出産に繋がっていくプラスの要素になるのではないかと考えている。

（委員）
　徳島市子ども・子育て支援ポータルサイトはとても充実している。その中に、結婚応援サイトがあるが、徳島市としても何か事業を行っているのか教えていただきたい。
　チャレンジ２の文言は、子どもを望んでいても授かることができない人もいる、そういった人等に誤解されかねない文言なので、慎重に扱った方がいい。
　赤ちゃんの駅登録推進事業に、とても期待しているところであるが、赤ちゃんの駅であることをどのような形で表示するのか。また、「すきっぷ」は、授乳・おむつ交換ができる施設としての周知を独自に行っているが、阿波おどりの時期の夜も開けており、多くの利用がある。それ以外の施設でも、阿波おどりの時期の夜も開けている施設が増えるといい。
　産前・産後家事育児支援事業は、とても良い事業であると思っているが、利用者があまり増加していない面もある。この事業のように、シニア世代の人の活躍の場がもっと増え、シニア世代との連携を考えられるといい。

（事務局）
　徳島市が主体となって、結婚支援に関する事業を行っている実績はない。徳島市では、民間が行っているイベントに後援を行うことはあるが、補助金の交付等は行っていない。
　赤ちゃんの駅登録推進事業は、登録頂いた事業者にステッカー・幟を掲示してもらうこととしている。基本的には、できるだけ、土日祝日も利用できる施設を認定していきたいと考えている。阿波おどり期間中については、施設の事情等によるが、なるべく協力していただけるよう努めていきたいと考えている。

（委員）
　子育て中の人が、子育てをしながら働き続けるためには、子どもが病気になっても安心して預けられる施設が必要であり、現状では、徳島市では医療機関がそのような役割を担っている。
　徳島市としても、「子育てするなら３人以上」というコンセプトを掲げているならば、フ

ファミリーサポートセンターとも連携した病児・病後児保育事業にも前向きに取り組む方針を掲げていただきたい。
　病児保育など働き続けられる環境づくりは、このチャレンジ達成の鍵を握る事業であり、早く取り組むことが必要ではないかと思う。

（事務局）
　徳島市では、現在医療機関と連携して、全部で１０箇所において取り組んでいるところである。ファミリーサポートセンターとの連携についても、次年度に向けて県と協議を進めているところであり、今後、予算対応についても検討していきたい。

（委員）
　徳島市の魅力発信の提案として、消費者庁の新しいオフィスが徳島県に設置されることに合わせて、徳島市においてフェアトレードタウン宣言を行ってはどうか。
　フェアトレード宣言は、県や市町村単位で行うものであり、まだ３つの自治体しか行っていない。フェアトレードは海外貿易に限ったものではなく、地産地消、環境保全、障害者支援のコミュニティ活動等、広く地域を持続的に発展させていくために自治体が取り組んでいくことを宣言するものである。
　水と緑の街という観光ＰＲに加えて、「徳島市はフェアトレードタウンである」という他の自治体ではあまり行っていないことを宣言して、魅力を発信していくことも必要ではないか。住んでいる人の意識が高いことも街の魅力になるのではないかと考えている。

（委員）
　金融機関の本業は融資等だが、情報力や県外とのネットワークなどの強みも持っている。
　自治体と地元の金融機関が総合戦略の分野で連携協定を結ぶ事例が出てきているが、産業や雇用以外の子育てやまちづくりの分野でも、金融機関の力を活用することが、地方創生の相乗効果を生み出していくことになると思う。
　そういった面での、徳島市の今後の考え方があれば、教えていただきたい。

（事務局）
　徳島市は、まだ協定を締結していないが、以前から継続して協議をしているところであるが、単に協定を締結するだけでなく、締結後にどんな事業ができるかということを考えながら、対応していきたいと考えている。

（委員）
　自治体により、単に協定を締結しているだけの自治体もあれば、協定を活用している自治体もある。前例を見て、しっかりと意味のあるものにしていただけるようお願いしたい。

（委員）
　徳島市のそれぞれの事業が、途切れていることがもったいない。例えば、徳島市が行うイベントに来た方に、徳島市の良いところを知ってもらう等、徳島市が行っている政策が、全部繋がっていき、循環するような工夫が必要だと思う。

（委員）
　徳島市をどのようなコンセプトで街の魅力を発信していくかが課題であり、できるだけ分かりやすい形で打ち出していくことが必要だと思う。
　アメリカで最も住みたい街と言われているポートランドでは、長年、色々な面で環境に配慮している街ということで、グリーンストーリーを打ち出し、それに基づき、様々な施策を展開している。徳島市の場合は、水都の魅力を活かして、ブルーストーリーを打ち出してはどうか。ジャパンブルーで藍が注目されていることもあり、良いのではないか。
　人口はある程度減少するのはやむを得ないが、それをカバーするためには、交流人口の増加により、経済を活性化させることが必要である。そのためには、徳島市は観光が重要であり、鳴門市等の周辺の地域と連携して、なるべく徳島市に滞在してもらう滞在型の観光拠点にしていくという発想が大事である。ただし、全国に水都はいくつもあり、その中で徳島市が面白いと思ってもらうためには、相当、尖った形で水都とくしまの魅力を打ち出していく必要がある。
　こうした中で、ＬＥＤアートフェスティバルは、地元の人が楽しむだけではなく、もっと県外の人に来てもらえる取組をしていく必要がある。そう考えた場合に、ＬＥＤアートフェスティバルの目標値（ＬＥＤアートフェスティバルの来場者に占める県外客の人数の割合）は低過ぎないかと感じる。瀬戸内国際芸術祭は、全国・世界にもとても知名度が高まっており、県外の方の比率は相当高い。ＬＥＤアートフェスティバルも十分、全国・世界に発信できる内容になっており、本当は目標値を４０％～５０％に設定してほしいという思いもある。目標を高く設定して、その達成のために、どのような工夫をするかという視点で施策を考えていけるといい。

（委員）
　地域の情報を海外に発信していくことが求められてきている。徳島県西部は、インバウンドで来訪者が多く来ているのに、徳島市は通り過ぎられる実態がある。徳島市の魅力を海外に発信することにより、来てもらえるようになるといい。

（委員）
　子育て・結婚・経済など幅広い話が出ている。昔は、地域で行っていたこともあるが、今は行政に対する要望が非常に多くなっている。行政としても、ある程度、交通整理していかないと、総花的に終わってしまうのではという感想を持った。

また、徳島市らしさを打ち出していくのは、インパクトがあるものの方が、市民に分かりやすくていい、なるべく方向性やイメージは骨太のものが出せるといいと考えている。

（委員）

ここ数年の間に、徳島市は子育てしやすいという母親の意見を多く聞くようになってきた。徳島市では、施設が多くできているが、施設に来られない母親への対応をどのようにしていくかが、重要である。家で困っている母親に対するきめ細かなサービスを考えてもらえるとありがたい。

（委員）

人口減少をテーマに、若者を市内に止める、出生数を増やすことを話し合ってきたが、人口減少が避けられないならば、多様な人の個性や能力を発揮できる場のマッチングなど、今ある人材の力をどのように、まちづくりに活かしていくかという視点も大切である。

多様性というキーワードが様々な場面で用いられているが、多様性の議論を深めることがまだまだであると感じている。社会的弱者の受け皿が不十分である。均質を強いる社会ではなく、多様性が当たり前に認められ、受け入れられ、活用されるまちづくりの視点を、大きな観点として持ってほしい。

男性が家事や子育てに参画できる職場環境づくりこそが女性が輝ける大きな要因になるという共通認識を持ち、多様な働き方ができる、男性もワークライフバランスが整った生き方・働き方ができる、違いを認め合って女性を活かすことができる徳島市づくりができるといい。